憧れの人：谷口義朗先生

李　春喜

谷口先生、ご退職おめでとうございます。長きにわたる教員生活、本当にお疲れさまでした。

実は谷口先生と私は、恩師と教え子という関係でもなく、同じ学部に所属する同僚という関係でもありませんでした。しかし、私にとって谷口先生は憧れの人でした。穏やかで裏表のないお人柄は、多くの人に愛されてこられました。得てして人は、年齢を重ねると計算高くなるものですが、谷口先生からはそういうものがまったく感じられず、いつも飄々とされていて、接する人にどこか安心感を与えるような方でした。

谷口先生と私との一番の思い出は、2011 年に「日本アメリカ文学会」の全国大会が関西大学で開催されたときのことです。谷口先生は文学部所属、私は、外国語学部の所属で、特に仕事をご一緒する仲ではなかったのですが、突然谷口先生から「今年、『日本アメリカ文学会』の全国大会の会場が関大なので、手伝ってくれませんか？」というメールが来ました。私も「日本アメリカ文学会」の会員ではありましたが、学会にはまったく顔を出さない幽霊会員でしたし、ましてや、全国大会の準備なんて何をしていいのかさっぱり分かりませんでしたが、深く考えることなく「いいですよ」と答えてしまいました。学会の全国大会の準備を経験されたことのある方はご存じだと思いますが、それは実に煩雑な作業をともないます。学会発表に使う教室を手配したり、発表者が使用する機材の準備をしたり、手伝ってくれる大学院生のアルバイトを依頼したり、会場に案内するための張り紙を貼ったり、立て看板を立てたり、講演者の演題に花を飾ったり、飲み物類の準備をしたり、懇親会場の手配をしたり等々、多岐にわたる作業が無数にありました。私には分からないことだらけでしたので、「〇〇はどうします？」、「××は△△ですよね？」と谷口先生に相談するのですが、先生は、「それでいいんじゃないの」、「適当にやっといてよ」とお答えになって、あとは研究室でコーヒーを飲んでいるという感じでした。私は「ええ!?」という感じで、事務職員の方のところへ相談に行ったり、手伝ってくれる大学院生に指示を出したり、業者さんと打ち合わせをしたり大忙しだったことを覚えています。しかし、私がいろんな方と打ち合わせをしたり相談をしたりして上手くいったのは、すべて、谷口先生が裏で大方の話しをつけておいて下さっていたからでした。それにもかかわらず、谷口先生は、「会場校挨拶」や「懇親会挨拶」で表に立たれるようなこともなく、そういう目立つ仕事は他の先生に依頼し、その先生が華を持てるよう配慮される方でした。それを見ていた私は、「ああ、自分も谷口先生のような教員になりたいなあ」と強く思ったものです。

私には、谷口先生について忘れられない思い出がもう一つあります。

谷口先生と私は、キャンパスで会えば立ち話をする程度の関係だったのですが、私が村上春樹の小説が好きだということを知ると、メールの文章に、「ちょっとよく分からないな。確かにそうだと思う。ぼくだってこんな注文をされたら困ってしまうだろう。ただ、一つだけ確実に言えることがある。完璧な注文は存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね。(←村上春樹

風)」と書いたり、メールの最後に「やれやれ」と付け加えたりする、ユーモアのセンスを持つ先生でした。

学問の話題になると、谷口先生はいつも「僕は何も知らないんだ」とおっしゃいますが、私が時々、「『〇〇』という人の本面白いですよね？」と水を向けると、大体読んでおられて、「ああ、あれ面白かったね」、「××も面白かったよ」と答えて下さるのが常でした。それを聞くだけでも、谷口先生が無類の読書家だったことが分かります。「自分は偉い」という素振りのまったくない先生ですが、私が本当に尊敬できる数少ない先生のお一人でした。

谷口先生が退職された後の大学は本当に寂しくなりますが、先生にはお身体に気をつけて、いつまでもお元気でいらしていただきたいと思います。そして機会があればキャンパスに足を運んでいただいて、「元気？」と一言声をかけていただければ嬉しいです。私も、大学教員としての生活がそんなに長く残っているわけではありませんが、谷口先生のお人柄に少しでも近づけるように精進したいと思います。

谷口先生、本当に長い間お疲れさまでした。